

こいぶみの前身「ひろしまる倶楽部」の表紙を飾ってくださったみなさんを、11年経過した今、再び訪れて「今」を話していただきました。

都市農業の可能性を 追求したい

安佐南区高取北・安佐北区久地
武内 誠さん

安佐南区高取や安佐北区久

地で、ミニトマト(アイコ、イエローアイコ、越冬作のアンジェレ)を50坪で周年栽培するのは、就農12年目の武内誠さんです。

就農当初は、コマツナ、ミズナ、その後は大玉トマト、キュウリなどを栽培しましたが、3年前から品目を絞りました。武内さんは、工業高校自動車科を卒業後、レーシングカーのプロドライバーを目指し、イギリスのレーシングス

クールで学びました。

日本に戻り、レーサーとしてレースに参戦していましたがお母さん

を亡くしたことをきっかけに、兼業農家だったお父さんの農作業を手伝うようになり、24歳で就農。その後は、

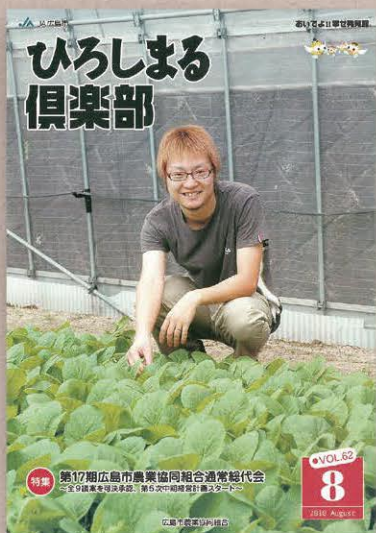
高校の同級生、箱崎哲太さんを工場長として迎え入れ、父の等さん、姉の一恵さん、妻の絵美さん、パート3名による8名で「ラクしてやろう」

をモットーに、日々効率良く作業できる方法を考えながら農業に従事しています。

JAYOUTH広島市の委員長を務め、農業、とりわけ今後の都市農業について考える機会も多い武内さん。農業現場が抱える大きな課題は農地と人手不足にあると見え、

限られた広さの農地で生産性を高めるため、そしてこれか

2010



2021

らの農業の成功例を示すために、スマート農業を実践しています。

その柱が、土壌環境制御型灌水装置です。ハウス内外に設置したセンサーから得られる日射量と土壌環境のデータをもとに、人工知能(AI)を使って必要な灌水や施肥の量を算出し自動供給できる装置を3年前に導入しました。広島県内でも先進的な取り組みでしたが、今ではミニトマトの効率的な栽培と安定供給を実現しています。

「施肥にかかる労力が減り、無駄な肥料を施用することがなくなりました。さらに、品種本来の味を引き出せるようになった」と武内さん。スマート農業の

メリットを実感しています。

都市農業を担う農業者として、限られた人・農地で営農を続ける方法を模索しながら、JAYOUTH広島市の盟友やJA、地域社会とともに歩み続ける武内さんの挑戦はまだまだ続きます。

▼地中に埋め込んだセンサー。地温、地中の水分量を計測します。



▲気温、湿度、日照量、地温、地中の水分量の情報を取得し、必要なタイミングと量を判断して、自動的に灌水・施肥できる土壌環境制御型灌水装置。